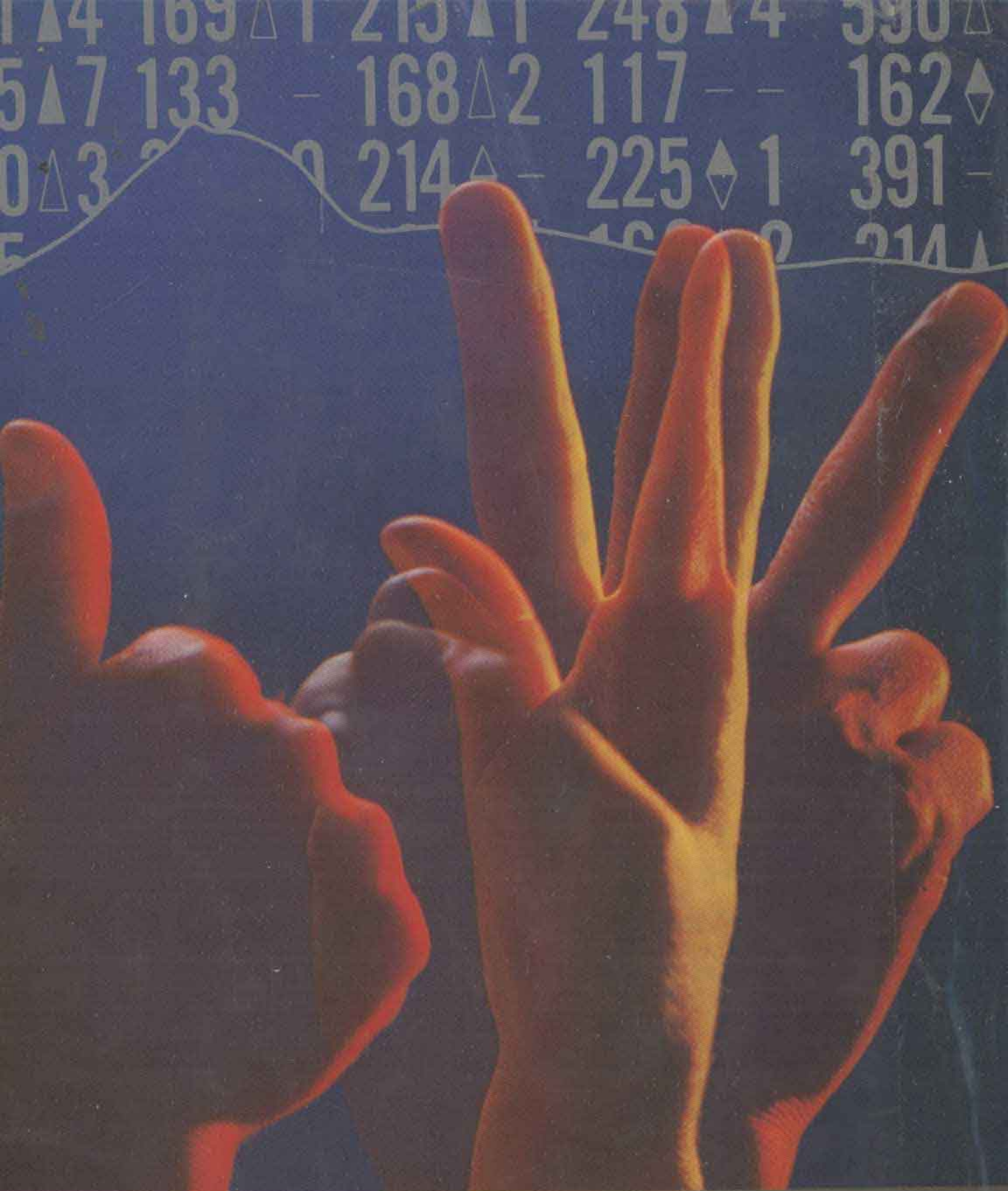




K A P P A N O V E L S

長編推理小説

闇の肌

黒岩重吾

お願い――

この本をお読みになって、どんな感想をもたれたでしょうか。「読後の感想」を左記あてにお送りいただけますしたら、ありがたく存じます。なお、このほかに、「カッパの本」では、どんな本を読まれたでしょうか。どの本にも、一字でも誤植がないようにつとめておりますが、もしお気づきの点がありましたら、お教えください。ご職業、ご年齢などもお書きそえくだされば、幸せに存じます。

東京都文京区音羽二の十二の十三

(郵便番号112)

光文社 出版局

長編推理小説 闇の肌

¥ 450

昭和47年11月30日 初版発行

昭和48年9月30日 17版発行

著者

黒 岩 重 吾

大阪府堺市上野芝 8-332-5

発行者

五十嵐 勝 彌

印刷者

鈴木 貞 三 郎

東京都文京区水道 1-2-1

公和印刷

発行所

東京都文京区音羽2

振替 東京 115347

株式会社
電話

光 文 社

東京 (942) 2241 (代)

落丁本・乱丁本は本社でお取替えいたします。(榎本製本)

表紙の模様・意匠登録 116613

© Zyūgo Kuroiwa 1972

長編推理小説

闇^{やみ}の肌^{はだ}

黒岩^{くろいわ}重吾^{じゅうご}



カッパ・ノベルス

目次

女 の 眼	153	夜 の ア リ バ イ	140	暗 い 顔	120	客 の 誘 い	101	客 殺 し	81	課 長 の 脅 迫	64	身 元 不 明 の 男	44	家 族 の な い 家	25	人 事 異 動	5
-------------	-----	----------------------------	-----	-------------	-----	------------------	-----	-------------	----	-----------------------	----	----------------------------	----	----------------------------	----	------------------	---

女 の 告 白	276	落 魄 ^{うちかく} の 男	263	女 と 株	249	夜 の 微 風	236	夜 の 顔	217	高 い デ ー ト	204	も う 一 人 の 女	187	未 亡 人	171
------------------	-----	----------------------------------	-----	-------------	-----	------------------	-----	-------------	-----	-----------------------	-----	----------------------------	-----	-------------	-----

イラストレーション

進藤 信一

人事異動

1

T証券大阪支店の事業法人部長だった道端^{みちはし}が、東京本店の調査役付という閑職に左遷されたのは、O電飾株の時価発行の責任を取らされた結果であった。

T証券は一流の下といった規模の証券会社である。道端はまだ四十七歳で前途有望だった。O電飾は、その名のとおり、電気器具を製造販売していた。電気器具といっても大メーカーのような、カラーテレビ、クーラー、冷蔵庫、電子計算機などではなく、ビルや一般家庭の電気装飾品の製造販売である。

ネオンサインや、シャンデリアから電気スタンドまで、装飾品的な電気器具であった。

人々の生活が豊かになり、贅沢^{ぜいたく}なものを求める時代になって、マンションや住宅の建築が、ブーム現象を起こし始めたところから、O電飾の業績も飛躍的に伸び、税引

で年間、対資本利益率十割を越える大きな利潤をあげるようになった。

最初は資本金は八億の非公開の株式会社だった。現在は十億である。社長は松谷^{まつたに}といつて一代でO電飾をつくった人物だ。各証券会社が、O電飾の株式公開に眼を付けないわけではない。

T証券もその戦列に加わった。

そして道端は見事、O電飾を口説き落とし、T証券の手で公開することになったのである。これで道端の前途は、ますます洋々たるものになった。当時、道端は四十五歳で、二、三年の後に重役になることは決定的だった。

資本金の一割、百六十万株が公募された。

公募価格は五百円であった。二部で上場されたが、対資本利益率十割の業績がものをいい、また株式ブームの波に乗って、O電飾は半年後に八百円の高値をつけた。

しかし、それが天井であった。

それから下がり始め、一年後には公募価格を割った。

それから時価発行で増資したのだが、昨年の秋、専務の岩本が小豆相場に失敗し、会社の株を一億五千万円も横領していたことが判明、それを待っていたように業績が悪化、この春の決算で三億という赤字を出し、O電飾の

株は二十円台まで暴落してしまった。

五百円で公募株を買った連中は、売ったが、その後時価発行で買わされた客は〇電飾、千五百円説の夢に踊らされ、持株はほとんど、抱いたままであった。

まず、一流紙の経済欄に、T証券に対して、痛烈な非難記事が掲載された。

ちよつとした街の電気器具会社を良く調査もせず、手数料儲けのために時価発行させたのは何事か、という記事であった。

公募株を掴つかまされた客からの、非難苦情も殺到した。もちろん、道端一人の責任ではない。

調査部の責任もあるだろう。ただ時価発行などは事業法人部の仕事である以上、道端が責任を取らされたのも無理はなかった。

こういうケースは、T証券だけではない。一流証券会社にだってあるのだ。

こんな株を掴つかまされた客こそ憐あわれである。昨年、幽霊会社に近いような会社の株を公開した証券会社もあった。

それはともかく、その結果、T証券の幹部クラスに、かなりの人事移動が行なわれた。

新しく事業法人部長となったのは、東京本店の営業次長だった山内やまうちである。

次長には、東京本店の、事業法人課長の大野木おののぎがなった。大阪の法人課長になったのは、大阪府下のB市の支店長だった佐見枝さきえだである。

佐見枝と大野木は、同期の入社であった。つまり佐見枝は、大野木より一步遅れを取ったわけだった。

それだけなら良いが、大野木の直属の部下といった恰好である。

部長と違って、次長と課長とではそんなに差はない、というものの、部下であることには変わりなかった。

送別会と歓迎会が行なわれる件で少しもめた。普通ならいっしょに行なわれるのだが、法人部の部長、次長、課長は左遷である。

それに、道端が送別会には出席しないということなので、結局、送別会も歓迎会もとをやめ、新任の法人部の山内、大野木、佐見枝、それに課長代理の吉野の四人だけがささやかな宴を持つことになった。

仕事の引継ぎが終わり、落ち着いた段階でキタの料亭で、その宴は開かれることになった。B市の支店長だった関係で、佐見枝は半年ほど、大野木に会っていなかった。

た。

佐見枝としては、大野木に、どう挨拶して良いか迷っていた。

今までのように、やあ、元気か、ではすまない。別に敬語を使う必要はないが、これからよろしく頼むぜ、くらいのことはいわねばならないだろう。

それを思うと苦痛だった。

会社の人事なんて、全く非情なものだと思う。この人事を決めたのは、常務取締役大阪支店長の筈田に違いない、と佐見枝は思っていた。佐見枝は、入社した当初から、どうも筈田が好きになれなかった。

いったい、俺と大野木とどこが違うんだ、と佐見枝はいつてやりたかった。学歴だろうか。佐見枝は私大だが、大野木は商大だった。

そういえば、筈田も公立の大学である。

しかし、仕事の面で、佐見枝は、大野木とそんなに違いがあるとは思えない。

ただ、佐見枝の場合、左遷ではない。小さな市の支店長よりも、大阪支店の法人課長のほうが、出世街道としては、本道であった。

不愉快なのは、すぐ上の次長に、同期の大野木がなっ

たことである。

佐見枝も、大野木も三十八歳だった。

二人とも、妻子がいる。佐見枝のほうは子供は小学生の男子一人だが、大野木には中学生の娘と、小学生の息子、三歳になったばかりの幼児がいた。

私生活の面では、大野木より佐見枝のほうが派手であった。小さな支店だが、支店長時代には交際費もあったし、支店の大手の客とキャバレーやバーなどに飲みにも行った。

B市には土地成金が多く、そういう連中は株も派手に買い、遊びも派手だった。

彼らは、佐見枝にとっては大切な客であり、今夜どうか、と誘われると断わり切れない。

ネオンの街で遊ぶのは好きだが、土地成金連中といっしよに飲んでも楽しくなかった。

彼らは典型的な、成金趣味の遊びかたで、女を口説くにも、金をひけらかして、無神経で厚顔だった。

そういう彼らに、反発するホステスでもいると、「何や、ホステスのくせに、生意気なことぬかしやがつて、澄ました顔しとっても腐れ××やないか……」

大きな声で怒鳴ったりするのだ。

そのたびに佐見枝は、いたたまれない思いがした。だから、佐見枝は交際費や浮かした経費は、自分一人で飲むことにしていた。

ミナミのバーで、行きつけの店が二軒あった。現在、佐見枝は、その二軒の店で二人のホステスと、浮気のつもりで肉体関係を持っていた。

それでも、佐見枝が、そういう土地成金と交際したおかげで、B支店の成績は、前の支店長時代に較べて、倍近くもあがったのだった。だから、法人課長になったのだろうが、大野木が次長とは、納得できない。

佐見枝と違って、大野木は私生活は真面目なほうだった。

佐見枝は学生時代から賭け事が好きだった。麻雀や、競馬が、彼の趣味だった。

当時は、今ほど競馬ブームではなく、学生で競馬に行く者はめったにいない。

麻雀なども、街の麻雀屋で、プロ相手にやっても、相手が二人以上組まないかぎり、そんなに負けるということとはなかった。

そういう佐見枝がT証券にはいったのは、株の相場を博奕だと思ったからである。

だが、株をやってみて、株が儲からないものだ、と知った。一時儲けても後で損をする。だから、佐見枝は、博奕的な相場の売買はやめて、T証券が推奨株を取り上げるとき、前もって安値で買い、会社が客に大々的に買わせる時期に、売るような方法に、方針を切り換えた。それでもときには損をすることがあったが、とにかく、現在、株で儲けた金は四百万近くになっている。

佐見枝は、その金は妻の須磨子には知らせていない。半分は無記名の割興ワキキにして、残りは友だちの名を使い、絶えず動かしていた。

その友だちというのは心齋橋しんさいばしの靴店の息子で、佐見枝の学生時代の麻雀仲間だった。

佐見枝は、中肉中背だった。色は黒いほうで運動神経が発達している。

それに反して大野木は色白で、今は中年太りの最中であつた。

ローゼンストックの眼鏡を掛け、どこから見ても、一流会社の部課長といった感じだ。

大野木のただ一つの楽しみはゴルフである。課長代理時代に始めたのだが、大阪支店時代はハンデ十七で、大阪支店内部のゴルフ大会で、ときどき優勝もしている。

佐見枝もゴルフをやったが、あまり性に合わなかった。運動神経が発達しているから、熱心にやれば、大野木に負けないだけの実力はつくだろうが、それよりも、飲んだり、バーのホステスと浮気をしたりするほうが、性に合っていた。

そういう意味で、佐見枝は、大野木と対照的な性格だった。

B市支店で成績をあげたのだから、大阪支店の課長にしてくれるなら、なぜ、営業課長にしてくれないのか、と佐見枝は不服だった。

佐見枝が、大阪支店の法人部で、大野木と顔を合わせたのは一週間前だった。

2

佐見枝が出社すると、大野木はすでに席にすわっていた。新任部長の山内はまだ来ていない。佐見枝は、東京に出張したとき、山内の顔は知っているが、口をきいたことはなかった。浅黒い、身体の軽そうな男だった。

大野木は、佐見枝と視線を合わせると、なぜか視線を外らせた。

先に挨拶するのは、君のほうだ、という意識があった

のだろう。

山内のテーブルが一番奥にあり、その前に佐見枝と、大野木のテーブルが並んでいる。右のほうが、大野木のテーブルだった。

並んでいるといっても、間隔はあった。こん畜生、という思いが胸に来たが、今、腹を立てれば、これから毎日、腹を立てどおしておらねばならない。

佐見枝は、大野木の席に行った。

「ひとつ、よろしく頼むよ、僕は法人のほうは初めてなんだ、君が来てくれたので、心強いよ」

佐見枝は笑顔でいったが、愛想笑いにならないように注意した。一応次長だから、立てねばならないが、卑屈になるつもりはなかった。

大野木は、回転椅子にすわったままで、

「僕のほうこそ、よろしく頼む」

まずおだやかな返事だった。ただ、佐見枝が妙に思ったのは、大野木が相変わらず視線を外らしたままだったことだ。

それは声が低くて、力がないような感じである。気のせいだろうか、と佐見枝は立ったまま、大野木を見つめた。

すると大野木は、ようやく視線をあげて、

「まだ、何か、ほかに用事が……」

と呟いた。

用事がないなら、もういいよ、といった感じだった。

そういう大野木の態度は、挨拶に来た部下に対するものであった。

佐見枝は、むっとした。

危惧していたことが、こうも早く現われようとは、さすがに佐見枝は、思っていなかった。大野木が、大阪支店から東京本店に移ったのは二年前だった。

その二年間に、大野木は佐見枝との間に眼に見えない壁をつくってしまった。

「いや、別に用事はない」

佐見枝は吐き出すようにいって、自分の席についた。

さっきから二人のやりとりを、うかがうように眺めていた吉野が、佐見枝の席に挨拶にやって来た。吉野は、佐見枝よりも四年後輩である。B市の支店長になる前、佐見枝が、大阪支店の公社債部門の課長代理だったときに、吉野とは一年ほど、いっしょに働いたことがある。

吉野は、絶えず周囲に気を配っているような、神経質な男であった。

吉野の挨拶を受けながら、佐見枝は、これでは、仕事がおもしろくないな、と思った。

まもなく、山内がやって来た。

待っていたように大野木と吉野が立ち上がった。佐見枝も仕方なく立って山内を迎えた。

そのとき、佐見枝の視線が、女子社員の武藤杏子の眼と合った。武藤杏子はどうか、佐見枝を眺めていたらいい。

武藤杏子は二十三歳になる。なかなかの美貌の持ち主で、大阪支店の女子社員の中でも、ベストスリーにはいる。これは、男子社員たちの噂だった。それに、T証券に入社してからもう五年になり、ずっと法人課なので、事務の面ではベテランだった。

久しぶりに見た武藤杏子の顔には、成熟した色香がにおっている。BGにしては化粧が濃い。それに、武藤杏子はこれまで、大阪支店の男子社員との間に、二、三噂があった。

そして、そういう噂を立てられた社員は、ほとんどが地方に左遷されている。

噂の最後の大物は、道端であった。

道端の場合は、明らかに仕事上での失敗で、武藤杏子

との噂は左遷とは関係がない。

佐見枝は、大阪支店の公社債課長代理だったところ、社内で行き違った際、武藤杏子をからかったりはしたが、デートに誘ったことはなかった。本能的に、危険な女だ、という勘がしたのである。

これは賭博師の勘かもしれない。

山内が席についた。

まず大野木が挨拶し、それから佐見枝、吉野と挨拶した。

山内は一見、磊落な男であった。

役付の三人の部下の挨拶に、

「僕も法人は初めてなんだ、初心者つもりで勉強するよ」

と笑顔で答えた。

山内はT大の経済を出ている。なかなかのやり手で、東京本店の営業次長時代も、相当な成績をあげたようであった。

一週間で引継ぎが終わり、その夜、役付の四人が大阪のキタの料亭で、顔合わせの宴を持ったのである。

大野木は豊中に建売住宅を三年前に買っていた。

東京に行っている間、細君の実家の者が留守番代わり

に住んでいた。だから、大阪に戻って来ると同時に、家族を東京から呼び寄せることができた。

山内には社宅があった。道端の後にはいるわけで、道端の一家が引越すまで、ホテル住居だった。

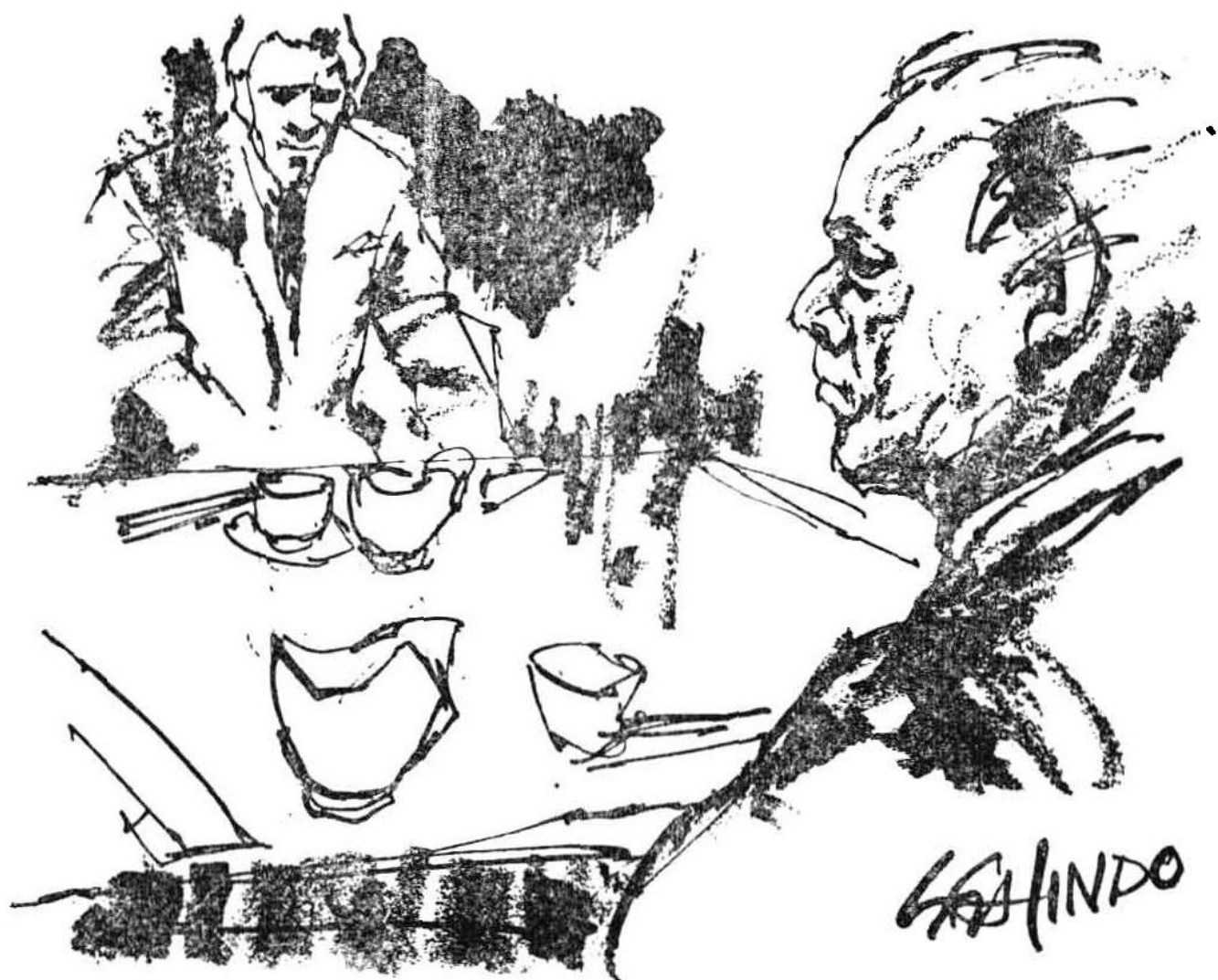
事務の引継ぎが終わっても、道端の家族がすぐ家を出るわけにはゆかない。

少なくとも、半月は、ホテル住居をしなければならぬ。山内はそれを楽しんでいるようだった。

四人が集まったキタの料亭は、T証券が利用している店だった。

酒がはいると、山内は初めてこれからの自分の方針を明らかにした。

「株の公開も大切だがね、要は、法人部として、利益をあげれば良いんで、大口の商売が一番だな。そのためには、各会社の情報集めが必要だ、だから、君たちは絶えず、各会社の幹部連中と密着することだね、交際費のほうも、なるべく出させるからね。残念ながらT証券は、四社のように大会社との取引が少ない、僕はT証券が一流になるためには、大会社との取引を増やさなければならぬ、と思っている。もちろん、今までの顧客は大切にすべきだが、それ以上に、大会社を新しく開拓すべき



だな」

山内のいうことは当然かもしれない。ここ数年、証券界の状況は大きく変わっている。それは外人が日本の株を買い出したことと、資本自由化におびえた自動車会社を始め、大企業が、自社株を安定株主にはめ込み、浮動株を少なくしようという、企業防衛作戦を取り始めたことだった。

これは外資だけに対してでなく、ライバル会社に対する防衛の意味もある。

また、たんに防衛だけではなく、企業の系列化によって、他企業を圧倒しようという積極的な意味もあった。

だから大会社の株は、百万株単位で、右から左に動いているのだ。こういう株を扱うのは、たいてい四社で、T証券などは、おこぼれを頂戴するくらいで、なかなか扱えない。

山内は、積極的に、四社に食い込もうというのであった。唇の厚い頑丈な山内の顔を眺めながら佐見枝は、理想としては立派だが、現実問題としては、なかなか理想どおりにいかない、と思うのだった。

戦後二十数年、一流の会社は一流の証券会社と結びつきができていて、そこに割り込む余地は、まず不可能だ



った。

道端が、無理をして〇電飾の公開合戦に勝ったのも、そういう厳しい現実があったからである。ただ、T証券としては、道端と同じような失敗は二度と許されない。

〇電飾のおかげで、T証券の信用はかなり落ちたのだ。「さあ、仕事の話はやめよう。今夜は愉快にやろうじゃないか」

と山内は、何もかもわかっているんだ、といわんばかりに頷く^{うなづ}のだった。それにしても、気の毒なのは、左遷組だった。今夜あたり、どこかで飲んでいるかもしれない。

どの会社でも歓送会は同席で開かれるものだ。別々に宴を持つなどという奇妙なことは、まずあり得ない。

もちろん、今夜の場合、歓送会というのではなく、内輪どうしの顔つなぎの宴であるが、佐見枝は何となく気が重かった。

それは、大野木が同席しているせいでもあった。しばらくすると、大野木に電話が掛かって来た。大野木は不思議そうな顔で、誰だろう、と呟きながら部屋を出た。まもなく戻って来たが、佐見枝は、大野木のようにすが、何となく変に思われて来た。

酒が回らない間、大野木は山内の話を、大きく頷きながら聞き、さかんに、

「部長のいうとおりです。私もこちらに来る前、高田重役から、同じようなことをいわれ、わが社がこれ以上伸びるのは、今、山内部長がいわれた方法以外ないと思っていました」

などごまをすっていたが、酒がはいるにつれて次第に無口になり、ときどき、山内が話しかけても、とんちんかんな返事をしたりするのだった。しかも、酒の飲みかたが早い。

大阪支店にいた当時、大野木はあまり酒を飲まなかった。だが、今、大野木の飲みかたを見ると、かなりの酒量のようにであった。

しかもあまり顔に出ない。

東京にいた間に、大野木はかなり変わったようであった。

吉野はかしこまって飲んでいる。課長代理といえ、ようやく出世街道を歩き始めたばかりであった。山内の前でかたくなっているのも当然だろう。佐見枝は、大野木を見ながら、この男には、何か悩みごとがあるのではないかと思った。

もしそうなら、大野木を叩き落とすのはそんな困難なことではない、と佐見枝は腹の中で、黒い牙をむいていた。先日、大野木が部下にいったような、

「ほかに用事は……」

という言葉をも、佐見枝は忘れていなかった。大野木には、細君が会社の重役の娘などというような、特別なバックはなかった。

もしバックがいるとなると、大阪支店長の筈田だが、筈田との関係もそんなに深いものではない。

そのとき、大野木が急に佐見枝に眼を向けた。

「佐見枝君、君と僕とは同期入社だ、そうだろう。しかし、今度は妙なことになった、僕は次長で君は課長だ、そうだろう」

とまるで念を押すようにいうのだった。

山内も、いったい何をいい出すのかと呆氣にとられたように、大野木を眺めている。

佐見枝も、山内の手前、そうだ、となれなれしくもいえずに、苦笑して頷いた。

「同期だからといって、公の席で対等に話をされちゃ困るんだ。二人きりなら良い、俺、お前の友だちで良い。しかし、公の席ではそういう態度は変えてもらわなくつ

「ちや、僕としても仕事の上でやりづらい、幸い、部長もおられるし、ここで念を押しておきたいんだよ」

山内は大野木から佐見枝に視線を移した。佐見枝の返事を聞こう、という感じだった。

「それは、わかっていますよ」

佐見枝は、腹が立ったが、山内の手前、敬語を使わざるを得ない。二人きりなら、ぶんなぐってやりたいところだった。

「うん、わかってくれれば良いんだ、やはり秩序というものがあるからね」

「佐見枝君も、わかったといっている。そういう話は止そう」

と山内が、さらに何かいいかけた大野木を制した。大野木は、はあ、といって深く、頭を下げるのだった。とたんに、座が白けてしまった。大野木はまた無口になり、黙々と酒を飲む。山内は仕方なさそうに、傍の仲居をからかい始めた。白けた空気を盛りあげることとはできなかった。

大野木の顔に汗が浮いている。大野木はハンカチを出してしきりに汗をふくが、すぐ^{にじ}滲み出てくるのだった。眼鏡もくもったと見え、今度は眼鏡を取ってふき始めた。

「ところで、佐見枝君、うちの連中は、どういうクラブに行っているのかね」

と山内が尋ねた。大阪支店の幹部連中が、どういうバーの常連になっているのか、佐見枝は知らない。佐見枝は、まだキタのバーで遊ぶ身分ではなかった。

「吉野君、知らないかい、道端さんがどんな店を使っていたか」

と佐見枝は吉野に尋ねた。

「はあ、道端部長が良く行かれた店は、キタ新地の『アンズ』という店です。〇電飾の公開のときに、そこを使われていました。私は二、三度お供をしただけです」

「『アンズ』だね。吉野君が知っているなら、行ってみようじゃないか。どうだな、大野木君」

と山内が大野木を見た。

すると大野木は、相変わらずハンカチで顔の汗をふきながら、

「部長、まことに申し訳ないんですが、今夜はどうも、身体の具合が、どうも、調子がおかしいんです」

と山内の誘いを断わったのだった。それには、佐見枝も驚いた。山内が気分を害したのは、明らかである。案の定、山内は、